

S1-1

び慢性軸索損傷における意識障害の重症度と 脳糖代謝の関係について

木沢記念病院 中部療護センター 脳神経外科¹⁾、

木沢記念病院 中部療護センター 医療技術部²⁾、

岐阜大学大学院医学研究科 神経統御学講座脳神経外科学分野³⁾

○中山 則之^{1) 3)}、八十川 雄^{1) 3)}、奥村 歩¹⁾、篠田 淳¹⁾、山元 直也²⁾、
福山 誠介²⁾、岩間 亨³⁾

【目的】 び慢性軸索損傷は認知障害から遷延性意識障害までさまざまな重症度の脳機能障害を呈するが、慢性期の脳糖代謝と意識障害重症度の関係について統一見解は未だない。昨年、当学会で重症遷延性意識障害患者の脳糖代謝について報告をしたが、さらに軽度認知障害患者まで含め検討を行ったので報告する。【方法】 対象は受傷6か月以降にFDG-PETを施行したび慢性軸索損傷患者52名で、以下の3グループに分類した。A：minimally conscious stateで認知障害を有するが、言語による意思疎通可能で各種神経心理テスト施行可能。B：minimally conscious stateで認知・意識障害を有し、言語による意思疎通に難があり神経心理テスト施行不可能。C：vegetative state。各グループについてSPM99を用いて正常例との群間解析を行った。【成績】 全グループに共通して、両側の前頭前野内側部、前頭葉底内側部、帯状回、視床に糖代謝の低下がみられた。さらに意識障害の重症度が増すにつれて、同領域の糖代謝低下範囲が広がり、さらに顕著となった。【結論】 び慢性軸索損傷における意識障害には局所の脳損傷だけでなく神経ネットワークの機能構造的損傷が存在し、上記領域の糖代謝低下が重症度と密接な関係があることが示唆された。今後治療、リハビリの効果判定への応用などが期待できる。